３　狸谷型ナイフ形石器

⑴　はじめに

仁田尾遺跡周辺ではⅥ層に薩摩火山灰，Ⅸ層以下に入戸火砕流堆積物が堆積し，入戸火砕流の二次及び風性堆積層とされるⅧ層から薩摩火山灰直下のⅦ層にかけて，ナイフ形石器文化や細石刃文化，縄文時代草創期の遺物群が濃密に展開する。同時にⅦ～Ⅷ層は良好な発達状況が見られ，Ⅶ層はａ・ｂ・ｃの３層に細分でき，ａ層に縄文時代草創期，ｂ層以下に細石刃文化と台形石器や小型の二側縁加工ナイフ形石器を主体とするナイフ形石器文化期の遺物を包含する。Ⅷ層では切出形ナイフ形石器を主体とするナイフ形石器が知られ，これらの成果を，層位毎及び遺跡間の系譜について桑波田が変遷図で示した。考察（Ｐ353～354）

ここではⅧ層の石器群に注目し，周辺及び周知の遺跡との対比を行うことで位置づけてみたい。

本遺跡のⅧ層の石器群が，24ブロック14分布域（ユニット）を構成することは本文で明らかにした。次に，ブロック毎の器種構成検討（表61・62Ⅷ層ブロック観察表）からは，ナイフ形石器が突出していることも明らかにされ，また，個別ブロック内の遺物観察でもナイフ形石器製作を行っていた観察結果が得られている。なお，Ⅷ層のユニット毎の代表的構成器種を示すため，第319図を作成した。

上記したナイフ形石器は，いわゆる切出形石器で，さらに本文中で記したように「基部に繋がる短辺の内弯状整形はやや緩やかであるが，形状及び背部の急角度整形剥離や打面転移を頻繁に行った多面体石核から剥離された素材剥片を用いる規則性が抽出できる」ことから，“狸谷型ナイフ形石器”（松藤1992）及びその変容形態と捉えられる。

この狸谷型ナイフ形石器（狸谷Ⅱ石器文化）に関しては，発見当初からＡＴ降灰直後の代表的石器モデルとしての評価及びその個性的形態等から注目され，本県及び南九州の石器文化の動向とも関連づけて論じられ，近年具体的報告が成されるようになった。

⑵　分布

平成５年（1993）の仁田尾遺跡（国土交通省）でその存在が明かとなり，その後，市来町今里遺跡，本遺跡Ⅷ層，御仮屋跡遺跡Ⅷ層，川内市前畑遺跡，金峰町箕作遺跡と時間経過と共に増加してきている。今里遺跡と前畑遺跡では既に報告が成され，2004年に報告された箕作遺跡はその充実した内容が公表されている。

①今里遺跡Ⅶ層

東シナ海に迫り出す丘陵の内陸側の裾野に立地し，その標高は84ｍ程である。狸谷型ナイフ形石器が，三稜尖頭器や剥片尖頭器等と出土し，それらの同時性を強く示唆しているが，出土位置等の把握が不鮮明で資料価値を減じている。

②前畑遺跡

高城川の支流，中間川と小幡川の開析で取り残されたシラス台地にあり，標高は72ｍである。狸谷型ナイフ形石器３点，二側縁加工ナイフ形石器１点，台形石器２点，三稜尖頭器１点が報告される。層堆積には恵まれていないが，これらの中で狸谷型ナイフ形石器３点（１～３）と台形様石器１点（４）は出土位置も接近し同時性が高いと判断する。周知の狸谷型ナイフ形石器と比べ１～３のナイフ形石器の短辺の仕上げは直線的であるが，長辺部の急角度整形及び素材剥片の剥離技術等は共通する。また，上牛鼻産の黒曜石（OB-A）を使用し，総じて大振りな仕上がりを成す。４は台形石器と報告されているが，剥片を素材としたもので製作上での連続性は見出せ無いことから台形様石器と認定したい。

③箕作遺跡

金峰町大坂，金峰山東南部に広がる標高210ｍの丘陵端部に位置する。Ⅶ層が薩摩火山灰，Ⅸ層が入戸火砕流二次堆積層で，その間のⅧ層が上下に細分され下位のｂ層が包含層となる。礫群12基，遺物総数597点は２ユニット・６ブロックを構成し，２ユニットは東西に区分され，東ユニットを狸谷型ナイフ形石器群，西ユニットを両面加工尖頭器石器群で構成するとされる。報告では，西ユニットを九州切出形系ナイフ形石器文化成立直前段階，東ユニットを九州切出形系ナイフ形石器文化最古段階との編年観を呈示し，西ユニットが東ユニットに先行するとの見解を示しているが，西ユニットの器種認定に課題を残す。即ち，東西の２ユニットに時間差を置く必要性は無く，器種構成からは同時性が伺え狸谷Ⅱ石器文化との近似性を強く示唆している。

頁岩を主体としたナイフ形石器群は総じて大振りな形状で，1463・1743等の短辺が直線的に仕上げられる等若干の変異は存在するが，背部の急角度整形剥離や基本形状の狸谷型ナイフ形石器の特徴は堅持されている。また，素材剥片が多面体石核から取り出されること，さらに1743の部分加工ナイフ形石器や704や865の掻器の存在も近似性を強調するもので，狸谷Ⅱ石器文化との時間的並行関係色濃く示している。

④国土交通省仁田尾遺跡

Ⅷｂ層に40か所のブロックを確認し，１万点を越す遺物が出土しているとされる。石器組成は，狸谷型ナイフ形石器と台形石器を主体に，少数の三稜尖頭器と剥片尖頭器及び掻器，削器等で構成するとされる。とりわけ狸谷型ナイフ形石器及び台形石器と三稜尖頭器，剥片尖頭器の共伴が強調されている。

⑤本遺跡（仁田尾遺跡）

Ｂブロックを主体とするⅢ地区からは，６点の狸谷型ナイフ形石器と２点の部分加工ナイフ形石器及び剥片尖

頭器１点が出土している。狸谷型ナイフ形石器の２点（８・９）については，刃部が直刃を呈すことから台形様石器と呼び分けている。なお，11の部分加工ナイフ形石器や剥片尖頭器との組み合わせは，狸谷Ⅱ石器文化と通じる。なお，４点の狸谷型ナイフ形石器はOB-Aが使用される。

Q～Xブロックで構成するⅪ地点からは,“刃縁と器身の長軸の交わり”が鈍くなっているが，５点の狸谷型ナイフ形石器が出土している。なお，４点はOB-A類を使用する。

M～Pブロックで構成するX・XⅡ地点では，２点の狸谷型ナイフ形石器，台形様石器１点と２点のハンマーストーンが出土し，ナイフ形石器にはOB-Aを使用する。

E・Fブロックで構成するⅣ地点からは，４点の切出形と２点の部分加工のナイフ形石器（17・26）が出土し，切出形ナイフ形石器の２点（22・23）は狸谷型ナイフ形石器と見られる。なお，25の小牧３A型尖頭器に関しては，出土状況は同時性を強く印象づけている。また，OB-Aを多用する。

C・Dブロックで構成するⅡ地区では，切出形１点と部分加工のナイフ形石器２点の確認で，いわゆる狸谷型ナイフ形石器は見られないが部分加工ナイフ形石器や剥片剥離や石器組成は，狸谷型ナイフ形石器を保有するⅣ地区と共通する。

⑶　まとめ

以上，本遺跡では狸谷型ナイフ形石器を中心に，所謂切出形ナイフ形石器に大きく依存した石器組成が看取できる。また，剥片尖頭器及び11・17・26等の部分加工ナイフ形石器等は狸谷Ⅱ石器文化との類似性・近似性を示すが，他方，三稜尖頭器や掻器及び台形石器・台形様石器の欠落・欠乏に関しては，本遺跡に帰結するか否か検討すべき課題である。さらに，本遺跡で新に提起された小牧３A型尖頭器との共伴性も継続すべき課題となる。なお，国土交通省仁田尾遺跡とは隣接することもあり，剥片尖頭器との共伴は補強されるが，三稜尖頭器との共伴は本遺跡に無い事例で，お互いの正式報告を基に改めた検証が求められる。本遺跡を含め，上記の遺跡は全て薩摩半島に分布していることとなる。

一方，大隅半島に関しては近年の大規模調査により，切出形ナイフ形石器等の新たな石器群の存在が明らかにされてきている。福山城ヶ尾遺跡第Ⅰ文化層，前原和田遺跡XⅥ層では，共に在地系の硅質頁岩製の切出形ナイフ形石器と台形石器（台形様石器）の石器組成が知られるが，狸谷型ナイフ形石器との関係は極めて曖昧で，むしろ，台形様石器群の動向に注目せざるを得ない。九養岡遺跡や桐木耳取遺跡の報告も加わり,桜島起源のP-17を介した石器群の動向が鮮明となりつつあり，また，宮崎県内の牧内第１遺跡や長薗原遺跡等複数の遺跡で狸谷型ナイフ形石器が明らかになってきていることから，大隅地域も巻き込まれることとなる。

狸谷型ナイフ形石器はその発見以来，常にAT降灰後の社会復元やその出自等が注目されてきているが，本遺跡周辺（国土交通省仁田尾遺跡を含む）及び箕作遺跡等の近年の調査実績からは，これらの地域が一大拠点である可能性も展望できる状況に達している。あわせて，狸谷型ナイフ形石器を含む切出形石器群が，これらの地域でいち早く展開した可能性も見えてくる。

①松藤和人「南九州における姶良Tn火山灰降下直後の石器群の評価を巡って」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ1992

②狸谷遺跡「熊本県文化財調査報告第90号」1987

③「第Ⅱ章駒方津室迫遺跡の調査」『大野地区遺跡群発掘調査報告書』大野町教育委員会1992

④人吉市狸谷遺跡や大野町駒方津室迫遺跡での発見以後,この狸谷型ナイフ形石器は注目を集めることとなり，AT降灰直後の石器群の検討を活発に促し，木崎氏の九州石槍文化論や萩原氏の南九州技術革新論，安斎氏の２項性に基づく剥片モードの切出形石器類の展開による台形様石器群の新たな展開予測等を提唱推進してきている。本県の石器群も上記の論功に巻き込まれながら進められてきたが，石器群として具体的にその存在が明らかにされたのはこの仁田尾遺跡を中心とした周辺遺跡の調査からである。

⑤木崎康弘「九州石槍文化の展開と細石器文化の出現」『九州旧石器』第３号1997

⑥萩原博文「ナイフ形石器石器文化後半期の集団領域」『考古学研究』第51巻第２号2004

⑦今里遺跡「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書56」『鹿児島県立埋蔵文化財センター』

⑧前畑遺跡「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書56」『鹿児島県立埋蔵文化財センター』2003・3

⑨箕作遺跡「金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書18」『金峰町教育委員会』2004・3

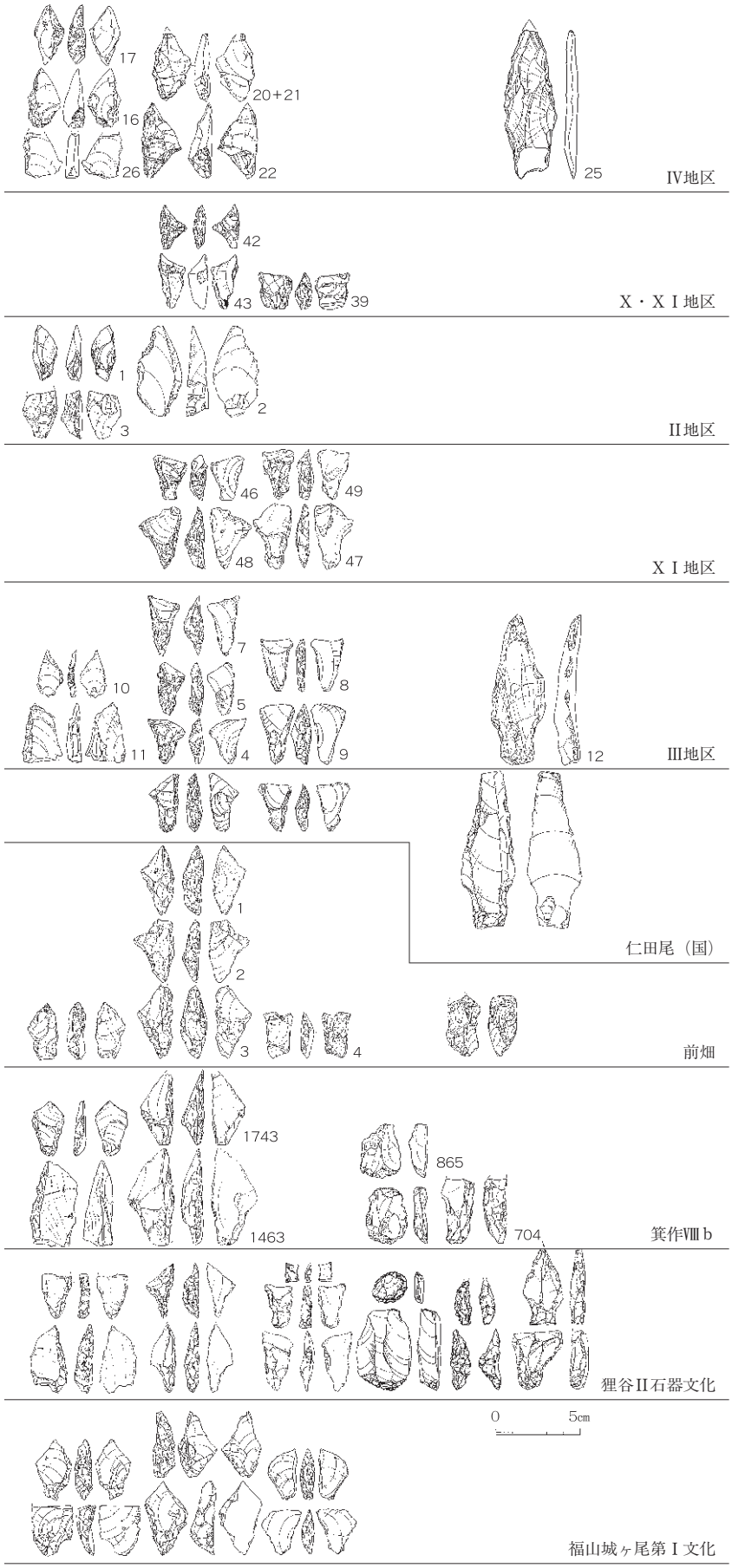
⑩西ユニット石器群が東ユニット石器群に先行するとの判断根拠に，両面加工尖頭器や三稜尖頭器等の尖頭器製作技術基盤があるとし，数点が尖頭器の未製品として抽出されているがその認定に課題を残す。

⑪宮田栄二「鹿児島県日置郡松元町仁田尾遺跡」『日本考古学協会』No47・1994

⑫福山城ヶ尾遺跡「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書60」『鹿児島県立埋蔵文化財センター』2003・3

⑬前原和田遺跡「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書56」『鹿児島県立埋蔵文化財センター』2002・3

⑭福山城ヶ尾第Ⅰ文化層は第XⅤ層に包含され，P-17の



第319図　狸谷型ナイフ形石器相関図

上位にあたる。前原和田遺跡ⅩⅥ層中にP-17が確認される。切出形ナイフ形石器の他，桐木遺跡第３・８遺物集中部及び桐木耳取遺跡第10・11・16エリアでは台形様石器が単独に出土する傾向が見られ，その位置づけも検討する必要がある。

⑮桐木遺跡「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書75」『鹿児島県立埋蔵文化財センター』2004・3

⑯桐木耳取遺跡「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書91」『鹿児島県立埋蔵文化財センター』2005・3

⑰安斎正人「台形様石器と台形石器―台形様・ナイフ形石器石器群(3)―」『九州旧石器第４号』2000